

## マーフィーの法則に基づく筋書きのない人生のドラマの便益

豊橋技術科学大学 正員 平松登志樹

## 1. マーフィーの法則の定着

アメリカでベストセラーを記録したマーフィーの法則<sup>1, 2, 3</sup>は、日本でも多数の人に読まれ1994年から1995年には訳本、解説書を含めて17冊出版された。読者からの投書を編集した本、帯文にマーフィーの法則を語る本、コンピュータのスクリーンセーバー、CD（嘉門達夫）までである。

歌はこうである。♪今年の流行は来年の笑いの♪来年の流行は今年のつまはじき♪疲れてしゃべりたくないときに乗ったタクシーの運転手は話し好きである♪上司のギャグは笑えない♪キスの味とはキスの前に食べた物の味である♪など。

しかし現在ではマーフィーの法則に関する本は少ない。これはマーフィーの思考が、すでにありふれたものとなっていることを示す。不完全な科学などの常識に頼ってきたという社会の反省が見られる。霞が関の官僚の判断を疑う事業仕分け、法曹界だけに頼ってられないとする裁判員制度など、従来の常識を疑い、本音の議論を期待する社会の要請のうねりを感じる。

不完全な科学の理論などの常識に頼りきるのではなく、日常生活における生身の自分そして社会や環境の姿を真摯に見つめ、科学の理論の一つ一つを常に見直すことが極めて重要であることをマーフィーは教えている。一見もっともらしく正しそうだが実は不完全な科学の理論を批判し、それに基づいて生産される不必要な人工物をリストラする。本研究ではマーフィーの思考がもたらす、人工物のリストラと生き甲斐を感じられる人生のドラマの便益に関する具体的な事例を示す。

## 2. 科学の理論の見直し

## 2-1. 財の量が多ければ効用が増大するか

水道法1条の豊富、低廉、清浄の水の供給という目的の豊富、低廉は意味がないだろう。例えば設楽ダム計画である。筆者は豊橋市に住んで17年になるが水の量に困ったことは一度もない。さらに都市の生活用水供給量を増やそうとする設楽ダムは、風呂に一日2度以上つかかると効用につながるという実態と離れた妄想を前提としている。

むしろ節水できたという満足感があるかもしれない。工夫しようとする脳の働き自体に効用を感じ取るのかもしれない。また山間部の自然を壊さずに生活できるという満足のほうがより強く意識されるかもしれない。

また水の質という観点から考えると、山間部の水は風呂水としては体にはきつく、都市近郊の少し汚れた水処理した水のほうがなじみやすいかもしれない。さらに飲み水としては、ひょっとしたら、一度体を通した水を土壤などで加工した水が、山間部の清らかなイメージを与える水よりおいしく感じられるかもしれない。

2-2. ダム開発などの公共事業による所得増大は適切な政策目標となりえるか。

所得が増大してもためつづけるだけである。仮に雪だるまのように儲け続けても何が楽しいのか。何に使うのか。守銭奴の経済学の理論<sup>4</sup>もあり貨幣保有の便益があるだろうが、それが生きがいにつながる人生は、さびしくはないだろうか。お金を使い切れなく死んでいく人生が本当に幸福といえるのだろうか？

筆者は守銭奴の便益よりむしろ蕩尽の便益を重視したい。蕩尽とまでいなくてもどんな環境財にお金を使うのかということに興味がある。CVMによる生き甲斐を感じられる環境財の探索、当該財への支払意思額の研究が望まれるが、その時に考えてなければならぬのは脱物質主義<sup>5</sup>である。

脱物質主義とは、人々の価値観が物質的な生活満足を得るよりも、自己実現や非拘束感など生き方を重視する傾向が強まっている状態を示す。すなわち文化活動や環境保全活動などでみられる、自分の人生を形づくる体験や経験などの筋書きのないドラマの便益<sup>6</sup>の存在である。

キーワード マーフィーの法則、筋書きのない人生のドラマ、便益  
連絡先 住所 〒441-8580 愛知県豊橋市天伯町雲雀ヶ丘1-1  
豊橋技術科学大学 TEL : 0532-44-6952 FAX : 0532-44-6947  
e-mail : tora@las.tut.ac.jp

従来の経済学などの科学が用意する物質的なものよりもっと生き甲斐を感じられるものは、例えば、選挙、住民運動、環境紛争、訴訟、環境ビジネス（起業）、教育、研究などであろう。

これらの便益と比べて従来の不完全な科学技術の用意するものは貧相である。例えばダム景観、洪水防止、水利用の便益をもたらすダム開発は断片的で部分最適化の解を目指すものでしかない。海など下流域への環境への影響などを考慮したトータルな解とは言い切れない。それにもかかわらず、巨大なコンクリートの塊に人類の科学技術の偉大さを感じ取りその姿を思い浮かべ陶酔する姿は滑稽である。

水資源や所得の例に見られるように「多い（豊富）」、「安い」、「大きい」といったような単純で断片的で荒っぽい目標の達成を支援する科学があるが、同様に「高い」建物、「速い」乗り物、競争（ゲーム）に勝つ「強さ」を支援する科学もあるだろう。我々は、単純で断片的で荒っぽい欲望にとらわれすぎて科学を選択し人工物を生み出し続けたのではないだろうか。結果として失った便益も大きいかもしれない。このような不完全な科学技術に翻弄されて不必要な人工物を生み出しつづけてきたことと、それらの人工物の存在によって人間が息苦しく窮屈な思いを感じている事例があることにそろそろ気がつかなければならない。

しかし、一方で、科学に関する単純で断片的で荒っぽいこれらの欲望を全否定すると、一部の人はストレスがたまるかもしれない。このような時には、次に述べる、わくわくする筋書きのない人生のドラマに参加することによって、このストレスを軽減できるものと考えられる。

## 3. 筋書きのないドラマの便益

## 3-1 ゲームの理論

さて筋書きのない人生のドラマは一種のゲームのようであり、ここではゲームの理論で語られていることは何かということについて述べる。

選挙、環境紛争、訴訟、環境ビジネス（起業）、教育、研究などが面白いのは、結果としての利得の獲得<sup>6</sup>だけが目的ではない。過程の面白さ、のるかそるか、どうなるかわからない筋書きのないドラマのプロセスが楽しめる。例えば、結果として失敗した学生社長育成プロセスにおいて、便益が発生した<sup>7</sup>。

従来のゲーム理論では結果の利得に焦点が当てられ、ゲームのプロセスの便益が考慮されていない。なぜならゲーム理論の研究者はゲームに強いゲームの勝者であることが予測されるからだ。しかし現実の社会には負け続けてもゲームを続ける多数の人がいる。競馬やマージャン、パチンコで負け続けてもゲームを続ける弱者のその便益（プロセスの便益）に焦点が当てられることは少ないのが現状である。しかし遠隔地授業や学生社長育成の失敗<sup>7</sup>、大学院や公務員試験の不合格、教授選で負け続けた結果としての成功の経験の少ない筆者には、プロセスの便益は事実として存在することを強く認識できる。失敗情報は隠れたがるということに関しては、筆者は畑村<sup>8</sup>と同じ意見で、後進の人が同じ過ちを起こさないように失敗情報を記録することは重要であるが、最後には成功する秘訣を探るという考えを強調するものではない。負け続ける負け犬の社会やゲームに関する認識を分析できるということを書きたい。社会やゲームに敗れた時のしびれるような快感、そして珍しく勝つことがあると望外の喜びを感じ取ることを付け加えよう。

## 3-2 性悪の便益

さらには性悪の便益も考察できる。性悪の便益には2つの側面がある。一つめは、性悪ないじめや自然現象などによる受け手の便益<sup>9, 10</sup>である。期待に反する出来事によって、事象に対する認識が改善する。マーフィーの法則では「母なる自然は性悪（しょうわる）女」だそうだ。自然なるものの本質なるものに近づくことができるかもしれないという便益である。従来の科学の理論に反した日常の事実から、その科学の理論の改善につながるものがある。これを促進するのがマーフィーの法則である。このとき付随して、何もかも裏目になるという快感（マゾの便益）も発生するかもしれない。また性悪な出来事によって生命体としての免疫が強化されるという便益もあるかもしれない。

次はいじめなどの被害者にとっては「性悪」な加害者の獲得する性悪の便益<sup>11</sup>である。負け犬には、傷口を塩でめられる試練が待ち受けている。被害者にとってはマゾの便益も発生することもあるかもしれ

ないし、また、加害者の弱者をいたぶる心理の研究(性悪の便益に関する研究)ができるという便益も発生する一方、被害者も加害者への恨みなど性悪な気持ちを抱くこともあるだろう。なお加害者、被害者ともに人間以外にも自然や環境を対象として拡張することができる。

筆者のぶざまなあがきのさらけだし<sup>11</sup>から、そのあがきを見たり思い浮かべるといふ加害者の性悪の便益の本質に迫ることができるかもしれない。例えば敗者の目からは自省<sup>12</sup>を怠ると何が生じるかについて考察できる。強者は性悪の便益の誘惑に負ける傾向があるのではないだろうか。自分を見つめる能力がなく、勝ちという結果だけに固執してきた成功者は他にすることがなくなって、最後に弱者(環境、生物や人も含め)いじめをするようになるのではないだろうか。またいじめを何度も繰り返すうちに、弱者の心をかき乱し人生をもてあそぶ行為を無意識のうちにする。不完全な科学をうのみにする教科書のお勉強ができ、偏差値が高く、その理由で親などから大切に育てられ自らが傷つくことを極度に恐れる臆病なタイプが性悪の便益の獲得に向かうのかもしれない。筆者を一時期指導したが最後には「見込みがないから田舎に帰ちなさい」と述べた環境政策の専門家の華山謙の葬式の時、都留重人の華山に向けた弔辞の中の「社会悪の根源を科学的に追及する」<sup>13</sup>という言葉の社会悪の根源とは性悪の便益のことを指しているのではないかと筆者は感じている。これらの行動は、不必要な人工物の氾濫、環境破壊にもつながる。自分の行動の醜悪さを見つめる能力があれば行動は修正できる。マーフィーは自省<sup>12</sup>作用を促進する。

なお性悪の便益は他人と自分の効用の差を重視するという理論と全く同じではない。人の不幸を目にした時、自分の効用水準を知覚し、その効用の差に満足感を感じることもあるかもしれない。しかし弱者をいたぶる、あるいは、環境破壊をするという行為自体に愉悦を感じ取り、自分の効用水準を基準としない心理も感じ取られる。加害者の性悪の便益は、この2つの心理が入り交じっているものと考えられる。一方、受け手のいじめられる主体にとっても、「マゾの便益」を感じることもあり、効用は低いとは言いきれない。

### 3-3 性悪の便益とコミュニケーション欲求

いじめる主体から逃れるために神(あるいは自然)にうらみをいいたくなったり、すがりつきたくなったりする。コミュニケーションをとりたくなる。人や生き物(ペット)に対してコミュニケーションをとりたくなる場合もあるかもしれない。また幸福を感じられる出来事があったら神などに感謝したいという気持ちになる。これもコミュニケーションをとりたくなる。この願望は例えば祭りによって成就される。

これらの苦痛や幸福(性悪(期待を裏切る便益)、期待どおりの便益)の組み合わせが人生をより彩のあるものにするかもしれない。まさに筋書きのないドラマである。

さて筋書きのないドラマについて個別にみていこう。最近ミステリーツアーなる旅行が評判である。行き先行事は、旅行当日までわからないようにするツアーである。またテレビCBCではスジナシという番組があった。これらも筋書きのないドラマを演出するが、環境や地域計画に関わる「筋書きのないドラマ」もある。

### 3-4 住民運動や環境紛争

現在、設楽ダム建設中止を求める会が存在している。設楽ダム予定地にある寒狭川など自然環境保全を望むグループは、有識者を選びつつ設楽ダムの検証を行い、一般市民へのよびかけのシンポジウムを企画する。また住民訴訟をおこし、有識者から原告側の証人を選び、裁判の審議での論戦の計画をねる。さらには会員の中から、設楽町の町長選挙へ出馬させる。

町長選挙の結果は、ダム推進派が勝利したが、負けた候補者は、家族から善戦を慰労され出馬してよかったという感想を述べている。

### 3-5 環境紛争に関する裁判の議論

環境紛争に関する裁判の審議では環境に関するCVMの結果も議論に加えられる。

設楽ダム建設予定地にある寒狭川の保全の便益、ダム湖の景観の便益、性悪の便益(生物や自然との提携<sup>6</sup>の関係を崩し、生物や自然を支配、服従させる支配欲による便益)をあきらかにして、費用便益分析を行い、その結果を裁判の審議の過程で議論する。現在、住民運動のリーダーたちの中には、お金で環境問題を解決する方法を嫌う人もいるが、現実には、保全をのぞむ一般市民からは、立ち木トラスト参加、会費の支出など住民運動への財政支援の形でお金は出ている。

裁判を含めた環境紛争やCVMは社会学<sup>14</sup>の研究対象にもなり事例の増加は社会学の発展にもつながる。またダムを否定する社会の選択となれば、ダムを撤去しダム以前の自然に戻す科学(人工物の整理や破壊工学<sup>15</sup>など)の研究が進められることになる。

### 3-6 コミュニティデザイナーと住民参加

紛争に発展せず、住民運動が、行政、企業、NGOなどの利害関係者を包括した市民運動となることもある。合意形成に関わるコミュニティデザイナーの便益もすでに報告されている<sup>16</sup>。

また最近町内会運営支援ビジネスが話題になっている(NHK ゆうどきネットワーク(2009.12.14)。夕方5:50分ごろより)町内会の行事などの情報公開のホームページ作成が仕事になるようだ。住民から問い合わせのメールがきているらしい。これもコミュニケー

ション欲求に基づくものである。支援ビジネスにはいろいろ注文が来ているらしいが、町内会という身近で親しみやすく、自らも行事をつくりあげていくという意味での参加がしやすいことも影響しているだろう。

これらの住民主導型のまちづくりも筋書きのないドラマではないか。まちづくり支援はコミュニティデザイナーの仕事かもしれない。

## 4 環境紛争とビジネス

さて環境紛争には、開発側と住民運動などの保全側の双方の支払意思額や受入補償額<sup>17</sup>が存在する。これを一つのビジネスチャンスととらえる。具体的にいえば、筆者には、設楽ダム中止、徳山ダムの破壊、長良川河口堰の破壊それぞれに対する支払意思額が各100万円、一方、建設、維持による苦痛を我慢する受入補償額(苦痛を我慢するために要求する金額)は各500万円である。人によって環境に対する嗜好の差から額の正負、大きさは異なるだろうが、国民全体のこのようなお金に関する願望をどう取り扱うか?どのように具体的に捻出、あるいは支出されてビジネスに結び付けるかが大きな課題である。

ここでは、環境にかかわるビジネスを提案したい。それは環境紛争に関する討論番組の企画である。裁判の論戦も有料テレビの対象と考えたい。ここでは、例えば、裁判官、研究者、行政(時として住民運動側)の意見をバカにして酒を飲む便益が発生する。科学の不完全さに補償される人を罵倒できる。あるいは討論会の場を企画して、本人を目の前にして罵倒する企画を考えてもよい。なお環境紛争に苦しむ主体は、性悪な大衆の、環境紛争の可視化への欲望によってさらに苦しむかもしれない。しかしテレビなどの収入の一部から拠出される受入補償額が苦しむ主体へ手渡されることによって苦痛は軽減されるものとする。

### 参考文献

1. アーサーブロック著、倉骨彰訳(1994)、マーフィーの法則
2. 嘉門達夫(1994)、マーフィーの法則、(CD)
3. 平松登志樹(1994)、マーフィーの法則を用いた、環境の認識手法の改善、環境システム研究、Vol.22,pp.78-83
4. 小野善康(1992)、貨幣経済の動学理論、東京大学出版会、p121-122
5. 今田高俊(2000)、日本の階層システム5 社会階層のポストモダン、東京大学出版会、pp.7-8
6. 今田高俊、金泰昌(2004)公共哲学13、都市から考える公共性、東京大学出版会 pp.215-239
7. 平松登志樹(2001)、学生社長育成プロセスに対するCVM、土木計画学研究・講演集、Vol24(2),pp.813-816
8. 畑村洋太郎(2000)、失敗学のすすめ、講談社
9. 平松登志樹(1995)、便益計測手法の適用と社会像の結びつきに関する一考察、環境システム研究 Vol.23
10. 平松登志樹(1995)、「性悪女」的水辺の魅力、日本民俗学 No.202,pp.126-128
11. 平松登志樹(2009)、性悪の便益に関する研究、第39回土木学会計画学研究・講演集
12. 今田高俊(1989)、自己組織性—社会理論の復活—創文社
13. 岡本雅美(2009)、華山謙の未完の航跡、環境と公害、第39巻、第1号、岩波書店 pp.44-49
14. 肥田野 登(2000)、入門社会学、日本評論社
15. 平松登志樹(2009)、環境保全への支払意思額と住民運動ビジネス、第64回土木学会年次学術講演会講演概要集
16. 今田高俊、金泰昌(2004)公共哲学13、都市から考える公共性、東京大学出版会 pp.153-173
17. 肥田野 登(1999)、環境と行政の経済評価、勁草書房、p19